

『鳳城聯句集』訓注稿（五）

楊昆鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿（本誌第三八号、平成二十九年九月）の続きとして、全三十作のうち、第十六から第二十までの五点をここに掲載する。

【作者】（初出人名のみ）

（第二）

梅心 梅心正悟、僧侶、南禅寺帰雲院。

（第四）

昌渭 文泉昌渭、僧侶、天龍寺鹿王院。

【凡例】

- ・ 五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。
- ・ 明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に（某カ）のように注記した。

・ 注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。
鳳城聯句集巻之下

先第一

慶長十六年六月二十三日

1 香^一雪 雜^ニ紅^一白^一

香^一雪^一 紅白を雜ゆ

2 観^ハ奇^一炎^一日^一蓮

観^ハは奇なり 炎日の蓮

雲

3 雕^一臺 輝^ニ彩^一艘^一

雕^一臺 彩艘を輝かす

4 工^ハ施^ス紫^一宸^一椽

工^ハは施す 紫宸の椽

賢

5 蓬^一夢 鐘^成弱^一

蓬^一夢 鐘は弱を成す

良

6 蘇^一才 錦^織川^一

蘇^一才 錦は川を織る

節

7 風^フ | 漪^ヒ | 簾^{レン} | 救^ク | 月^{ツキ}

外

14 萬^{マン} | 言^{ゴン} | 道^{ドウ} | 浪^リ | 伝^{デン}

萬言 | 道は浪りに伝ふ

良

8 午^ヌ | 院^{エン} | 茗^{メイ} | 烹^{ホウ} | 泉^{セン}

午院 | 茗は泉を烹る

御

15 小^コ | 車^{シャ} | 無^ム | 軌^キ | 蝶^{テフ}

小車 | 軌無きは蝶

賢

9 鼎^{テイ} | 立^{リツ} | 分^{ブン} | 三^{サン} | 教^{キョウ}

鼎立 | 三教を分かつ

潤

16 一^{イツ} | 釣^{ニル} | 上^{ウヘ} | 釣^{ニル} | 鱒^{ニル}

一釣に釣に上るは鱒

外

10 盃^{サイ} | 看^{カン} | 並^ス | 八^{ハチ} | 仙^{セン}

盃看 | 八仙を並す

竹

17 水^{スイ} | 兀^{トメ} | 跣^{ヒナ} | 蘆^{アシ} | 脚^{カク}

水兀として蘆脚を跣にす

節

(1) 白^{シロ} | 花^{ハナ} | 蘇^ソ | 軾^{キツ} | 「花間置酒浄香発、争挽長条落香雪」(月夜与客飲杏花下) など。紅の蓮に白い蓮が交っている光景。

(2) 救月は月蝕のこと。唐代詩人盧仝、別号玉川子に「月蝕詩」がある。蘇軾の「玉川狂直古遺民、救月裁詩語最真」(田国傳見示石炭詩、有鑄劍斬佞臣之句、次韻答之)はその著名な長詩に触れている。

(3) 蘆仝は「茶歌」(古文真宝)を作り、茶仙とも呼ばれる。「増補国華集」「茶」項に「蘆茶、同仝也」とある。

(4) 儒・道・釈の三つ。「化物自一心、三教斉発起」(蘆仝「寄贈含曦上人」)。

(5) 李白や賀知章など八名の著名な飲者。杜甫「飲中八仙歌」。

(6) 五字城、五言詩のこと、五言城とも。「五字城辺欲策功、諸公百戦気如虹」(月舟「詩戦」)。

(7) 榮譽を独占するという意だが、ここは美景を独り占めにする意か。

(8) 高く聳え立つ様。水が「兀」と形容されるのは珍しい。また「蘆脚」は蘆の根元の意であるが、用例は未見。

11 鳴^{ナリ} | 詩^シ | 隱^{イン} | 頭^{カウ}

詩に鳴りて詩隱は頭はる

重

21 功^{コウ} | 叩^{カウ} | 画^{カク} | 麟^{リン} | 武^ブ

功は叩し | 麟に画く武

御

12 鍊^{レン} | 字^ジ | 城^{シヨウ} | 堅^{ケン}

字を鍊りて字城は堅し

雲

22 貧^ヒ | 清^{セイ} | 楽^{ラク} | 魯^ロ | 淵^{エン}

貧は清し | 魯を染しむ淵

賢

13 擅^{テン} | 美^{メイ} | 山^{サン} | 晴^{セイ} | 好^{コウ}

美を擅にす | 山は晴れて好し

景洪

23 權^{ケン} | 籬^シ | 移^シ | 幻^{エン} | 境^{キョウ}

權籬 | 幻境を移す

雲

24 莫^レ曆^ニ記^ス新年^一

莫^⑨曆 新年を記す

節

25 鶯^レ独^リ厭^ニ凡^一羽^一

鶯独り凡羽を厭す

外

26 鵲^ハ他^ノ巢^ニ仏^一肩^一

鵲は他の仏肩に巢くふ

御

27 吞^ム声^ヲ幽^シ寺^ノ聲^一

声を吞む 幽寺の聲

良

28 遮^{レル}眼^ニ半^一窓^ノ篇^一

眼に遮る 半窓の篇

潤

29 耕^メ筆^ヲ学^ブ沮^一溺^一

筆を耕して沮溺を学ぶ

御

30 弄^レ文^ヲ慕^フ固^一遷^一

文を弄して固遷を慕ふ

竹

(9) 日によって莢が規則的に増減すること、莢の数などから曆が判断できる。『抱朴子』に「唐堯觀莫莢以知月」と記す。「聡明堯曰欽／莫生諧曆日」（大永七年九月尽和漢百韻）。

(10) 釈迦が菩提樹の下で修行し悟りを開いて山を出る時の姿が詩に詠まれ、絵画の題材とされた。「蘆芽穿膝鵲巢肩、何事苦行経六年」（梅花無尽蔵「出山釈迦像」）。

(11) 声を抑えること。『碧巖録』第十則「若向上転去、直得釈迦・弥勒・文殊・普賢、千賢万聖、天下宗師、普皆飲氣吞声」。

(12) 『景德伝灯録』第十四澧州薬山惟儼禪師に「有僧問和尚、尋常不許人看経、為什麼却自看。師曰、我只因遮眼」と

ある。王十朋「一舍蕭然学有餘、窓間遮眼尽文书」（和方叔見贈二絶、其二）。

(13) 長沮と桀溺、古代の隠者。『論語・微子』「長沮桀溺耦而耕」。

(14) 班固と司馬遷。

31 排^ス檐^ヲ垂^ル手^ヲ竹^一

檐を排す 手を垂るる竹

洪

32 横^レ霧^ヲ返^一魂^ノ梅^一

霧を横たふ 返魂の梅

節

33 自^レ畜^蓋臍^ヲ臍^ヲ臍^一

自畜 臍を蓋ふ臍

雲

34 鰥^一情^啼血^ヲ鵲^一

鰥情 血に啼く鵲

御

35 層^一欄^思越^ヲ越^一

層欄 越を思へば越

外

36 屯^一陣^伐燕^ヲ燕^一

屯陣 燕を伐つ燕

良

37 謀^ハ変^ニ彼^ノ蔵^一泉^一

謀は変ず 彼の蔵泉

賢

38 活^一機^祖正^ノ偏^一

活機 祖の正偏

節

39 滅^ス宗^ヲ篋^ヲ葦^一毒^一

宗を滅す 篋は葦毒

節

40 薄^メ斂^ヲ桁^ヲ蒲^一鞭^一

斂を薄くして桁は蒲鞭

雲

(15) 古代は竹簡で歴史を記録したことから、竹編や汗竹など竹の語を以て史籍をいう。前句の史家から生え並ぶ竹を連想。

(16) 「思越」は越の国を思うこと。李白「代馬不思越、越禽不恋燕」(古風其六)など。また「思越」は心神が散漫し、また思いが飛躍すること(漢語大詞典)。

(17) 宋・楼钥「以燕伐燕夷攻夷、吾国何与潜与期」(寄題臨江徐秘閣儒榮堂)。

(18) 『碧巖録』第四十三に「垂手還同万仞崖、正偏何必在安排」とある。「更須繞砌從頭看、祖意明明絕正偏」(明極楚俊遺稿「草庭」)

(19) 不明。用例も未見。「周原膺膺、葦荼如飴」(詩經・大雅・縣)とあるように、葦は菜の意。篋は座禪を戒める竹籠か。

(20) 『後漢書・劉寬伝』「吏人有過、但用蒲鞭罰之、示辱而已、終不加苦」。桁は刑具。

41 拙^ヘ似^{ヨリ}鳩^モ 苛^ク政 鳩よりも拙きは苛政 御

42 獲^ル非^ラ熊^ニ 兆^ニ 眈^ク 熊に非ざるを獲るは兆眈 賢

43 濁^セ 滄^ル 胸^ニ 次^ク 漚 濁せば滄る 胸次の漚 潤

44 地^ハ 易^シ 指^シ 那^ノ 天 地は易ふ 指那の天 雲

45 雲^ハ 豈^ニ 相^ス 頭^ヲ 帽^ト 雲は豈に頭を相する帽ならんや 洪

46 眈^ハ 其^レ 缺^ク 齒^ノ 棉 眈は其れ 缺齒の棉 外

47 蛩^ニ 哀^シ 難^シ 面^ニ 壁^ニ 蛩哀んで壁に面し難し 良

48 蚩^ク 耀^ル 盍^ヲ 肥^ク 煙^ヲ 蚩耀きて盍ぞ煙を肥やさざる 御

49 粧^ル 緑^ニ 老^シ 松^ノ 麗 粧緑にして老松麗し 竹

50 卷^ニ 黄^ニ 多^ク 根^ノ 宜^フ 卷黄にして多根宜ふ 潤

(21) 「禽經拙者莫如鳩、巧者莫如鶻」(佩文韻府)。南宋・曾凡「但知繞樹如飛鶻、不解營巢似拙鳩」(寓居吳興)。

(22) 不明。後考を待つ。

(23) 『虚堂和尚語録』巻第一「買帽相頭、隨家豊儉」。

(24) 『無門関』宗紹「缺齒老胡、十万里航海、特特而来」。

(25) 不明。後考を待つ。

(26) 根多、根葉樹、『西陽雜俎』。

51 那^ノ 僧^ノ 冠^ノ 冕^ノ 契 那僧ぞ 冠冕の契 賢

52 是^レ 賊^ト 甲^ノ 戈^ノ 玄^ト 是れ賊 甲戈の玄 竹

53 種^ニ 智^ヲ 土^モ 無^シ 寸 智を種にして土も寸無し 御

54 抱^キ 愁^ヲ 劫^ヲ 幾^ク 千 愁を抱きて劫は幾千 良

55 化^一梳^二翎^三鶴^四鬢^五 翎を梳る鶴と化するのは鬢

雲

63 樂^一云^二流^三繞^四砌^五 樂と云ふ 流れは砌を繞る

洪

56 鬪^一縮^二角^三蝸^四涎^五 角を縮むる蝸を鬪しむるは涎

澗

64 幾^一許^二路^三多^四阡^五 幾許り 路に阡多し

良

57 莊^一海^二郭^三為^四瘴^五 莊海 郭を瘴と為す

外

65 寬^一作^二程^三吟^四履^五 寬く程を作るは吟履

雲

58 莘^一郊^二伊^三耨^四田^五 莘郊 伊田に耨きる

節

66 品^一評^二句^三雅^四筵^五 品く句を評するは雅筵

竹

59 稱^一帰^二休^三意^四景^五 帰休の意に称ふは景

御

67 間^一居^二琴^三瑟^四友^五 間居 琴瑟友たり

御

60 認^一利^二走^三蹤^四廊^五 利走の蹤を認むるは廊

雲

68 密^一室^二礁^三樵^四禪^五 密室 礁樵の禪

賢

(27) 裝備の戈や甲が黒々と光ること。「玄」は前句の末字「契」からの連想か。

(28) 蘇軾「風松時落蕊、病鶴不梳翎」(二月八日与黄煮僧曇穎過逍遙堂、何道士宗一問疾)。

(29) 蝸の角に練り広げられる戦い「蛮触交戦」(莊子)から、蝸涎から転じて涎と唾が飛び交う論戦をいう。

(30) 不明。戦により城郭に疫病が流行る意か。

(31) 『孟子・万章上』「伊尹耕於有莘之野」。

(32) 市中の店舗。白玉蟾「大隠従来只市廛、年来教法況蕭然」(道過成蹊庵偶成旧風一篇)。前句の隱者に市を連想した。

61 退^一亦^二坐^三閑^四散^五 退も亦閑散に坐せらる

竹

(33) 黃庭堅「黃州副使坐閑散、諫疎無路通銀台」(次韻子瞻武昌西山)。

62 妙^一中^二融^三別^四円^五 妙中 別円を融す

澗

(34) 天台宗における藏通別円。「此經無字有誰伝、非藏通分非別円」(雪叟詩集)。

(35) 「客行雖云樂、不如早旋帰」(文選・古詩十九首第十九)。
(36) 「作程」は模範や法度を作る意であるが、陸游「東阡南陌適逢晴、小蹺輕裝短作程」(出遊四首、其四)のように、旅程の意味で用いられる。
(37) 「礁樵」は用例未見、樵漁に同意か。

71 棠^リ妃^リ楊^リ醉^リ貌^リ 棠妃は楊が醉貌

72 木^リ母^リ茜^リ妖^リ妍^リ 木母は茜が妖妍

73 勝^ハ豈^ヤ載^レ商^レ舶^ニ 勝は豈に商舶に載んや

74 寒^メ猶^ス坐^ス客^レ氈^ニ 寒くしては猶客氈に坐す

75 鷗^ハ師^レ鳧^レ屑^レ就^{コト} 鷗師 鳧は就くことを屑しとす

76 鮑^リ肆^リ肉^ス羅^ス糶^ヲ 鮑肆 肉は糶を羅ぬ

77 寧^ヤ行^ハ秦^ノ余^ノ力^カ 寧ろ行はんや秦の余力

78 治^レ洛^ヲ夏^ニ既^ニ胼^ス 洛を治めて夏は既に胼す

79 倦^リ鞋^リ平^レ処^モ嶮^シ 倦鞋 平処も嶮し

80 漏^リ篋^広河^涓 漏篋 広河は涓たり

(38) 前句の「楊」と対偶すべき茜は人名か。宋寇准に茜桃という妾がいたが、梅と関係する記録は見られない。或いはここは単に梅の艶美さをいう。梅堯臣「芳梅何茜茜、素葉吐層層」と見える。

(39) 杜甫「才名四十年、坐客寒無氈」（戲簡鄭広文度兼呈蘇司業源明）。

(40) 鷗を師とするか、用例は未見。

(41) 蘇轍「伝言夏絳塞洛水、上帝爰此無敢偷」（息壤）。また禹が治水に励み、手足に胼胝が出来たという。「禹鑿龍門、（中略）手足胼胝、面目黎黒」（史記・李斯列伝）。

81 草^ハ乱^テ露^珠碎^ク 草乱れて露珠碎く

82 荷^ハ枯^テ秋^ノ扇^捐 荷枯れて秋扇捐つ

83 双^ハ鴛^心不^レ二^フ 双鴛 心二つあらず

84 四^ハ鴝^道争^レ先^ヲ 四鴝 道先を争ふ

85 星^ハ爛^相望^故 星は爛たり 相望む故

86 代^ハ昭^徴起^賢 代昭にして徴して起つ賢

87 選^官雖^二晚^達 官を選ぶ 晩達と雖も

88 接^衆這^風顛 衆を接す この風顛

89 入^睡拾^忘帯 睡に入りて拾帯を忘す

90 酬^知牙^絶絃 知に酬ひて牙絃を絶つ

(42) 四海を指して翔る鴝か、用例は未見。「鴻鴝高飛、一

挙千里」(史記・留侯列伝)。

(43) 出世が遅いこと。杜甫「馮唐雖晚達、終覲在皇都」(続得観書迎就当陽居士止正月中旬定出山峡)。

(44) 諧謔瘋癲を以て漢武帝に仕えた東方朔。杜甫「尚想東方朔、諧謔割肉帰」(社日二篇、其一)。

(45) 箒を忘れることは、『分別功德論』に「此比丘精神疎鈍、仏教使誦掃帚、得帚忘掃、得掃忘帚」と見える。

91 竜鍾^{リウキョウ} 離袖^{リシュウ} 涙 竜鍾たり 離袖の涙 洪

92 燕飲^{センイン} 若樽^{ニクソン} 権 燕飲す 若樽の権 御

93 縄削^{ナヒキ} 欺^{ウソ} 般^{パン} 甫^フ 縄削 般を欺く甫 賢

94 経炊^{キョウシ} 同^{ドウ} 孔^{コン} 辺^{ヘン} 経炊 孔に同じき辺 外

95 来^キ 遅^シ 含^{カン} 詔^{シウ} 鳳^{フウ} 来ること遅し 詔を含む鳳 節

96 飽^キ 飜^フ 下^カ 鞞^ニ 鸛^ソ 飽きは飜る 鞞に下る鸛 雲

97 楓^キ 落^{ラク} 霜^{ソウ} 遮^セ 莫^{バク} 楓落ちて霜 遮莫 良

98 蘭^{ラン} 奢^{シヤ} 社^{シャ} 儼^{エン} 然^ニ 蘭奢 社儼然 潤

99 舍^セ 諸^{シュ} 陶^{トウ} 瓦^カ 积^{セキ} 舍諸 陶瓦の积 御

100 孝^{コウ} 也^ヤ 錫^{シキ} 盆^{ボン} 連^{レン} 孝なり 錫盆の連 竹

(46) 熟語としては未見。酒を意味する若下と樽を合わせた語か。

(47) 大工が墨糸を以て木材に線を引き削ること。また文章などを修正すること。韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」に「不煩於縄削而自合也」と見える。また朱熹に「伏誦秀野劉丈閑居十五詠謹次高韻率易呈伏乞痛加縄削是所願望」十五首がある。甫は杜甫、般は公輸般。詩文を添削する杜甫が大工の公輸般を欺くほどだという。

(48) 楊万里「書生一腹無十困、経炊史酌不曾飢」(寄題邵武張漢傑運千万卷楼)。「辺」は前漢学者の辺韶。昼に臥しているところを門下生に笑われ、「辺為姓、孝為字。腹便便、五経笥。但欲眠、思経事。寐寐与周公通夢、静与孔子同意」(後漢書)と答えた。

(49) 鸛は鷹と並んで勇猛また暴虐な人を譬える。鞞は鷹狩りの際、腕に着用し鷹を載せる革製の手袋。「脱鞞」という熟語があり、束縛から解放されることを言うが、ここで「下鞞」というのは逆に羽を休め腕に降り立つこと。

(50) または蘭閣、賞賛の辞。『世説新語』に丞相の王導が「因過胡人前弹指云、蘭閣、蘭閣。群胡同笑、四座並歡」(政事)とある。

簫第二 慶長十七年正月二十三日

1 鶯^ハ、可^カ三^シ声^シ一^ト中^{チウ}律^{リツ} 鶯は声中の律なるべし

2 聴^ウ奇^イ和^ス舜^ノ韶^ヲ 聴くならく奇なり 舜韶を和す 御

12 濃^ニ淡^ク雪^ノ氷^ノ標^ト 濃淡 雪氷の標 良

3 鳳^ハ呈^ス仁^ノ者^ノ瑞^ヲ 鳳は仁者の瑞を呈す

13 湖^テ漲^テ鴛^ノ浮^リ没^ス 湖漲りて鴛は浮没す 重

4 爰^ニ止^テ奏^ス義^ノ簫^ヲ 爰に止まりて義簫を奏す 澗

14 瀑^テ飛^テ竜^ノ臉^ト跳^ス 瀑飛びて竜は臉跳す 御

5 禁^ノ苑^ニ官^ノ梅^ノ百^ニ 禁苑 官梅百なり 雲

15 過^リ三^ニ廬^ノ五^ノ笑^ト 三に過たり 廬の五笑 澗

6 故^ノ家^ノ衆^ノ木^ノ喬^シ 故家 衆木喬し 節

16 号^レ七^ト宋^ノ參^ノ寥^ト 七と号す 宋の參寥 雲

7 移^レ蓬^ヲ仙^ノ日^ノ耀^ク 蓬を移して仙日耀く 梅心

17 林^ノ袂^ニ裏^ム幽^ノ寺^ヲ 林袂 幽寺を裏む 節

8 籊^ヲ竺^ヲ教^テ天^ノ昭^シ 竺を籊きて教天昭し 竹

18 柳^ノ糸^ヲ垂^テ半^ノ橋^ニ 柳糸 半橋に垂る 心

9 曉^ノ吹^ル乱^ル鐘^ノ色^ヲ 曉吹きて鐘色を乱る 齡

19 檣^ニ從^テ風^ノ定^テ燕^ト 檣には風定りてより燕 竹

10 澗^ノ流^ハ絶^ル爨^ノ焦^ニ 澗流 爨焦に絶る 超

20 座^ハ在^テ廷^ノ清^ノ貂^ト 座は廷の清きに在りて貂 齡

(1) 舜が作った楽曲の名。李商隱「豈意聞周鐸、翻然慕舜韶」

(5) 王十朋「孤標相對楚天涯、寒不能威意自佳」(四日雪坐間有江梅花水仙花因目曰三白)。

(2) 「簫韶九成、鳳凰來儀」(書經・易稷)。

(6) 五笑は五柳先生が笑うことか。慧遠法師が陶淵明と陸修静を見送るに思わず涙を過ぎた故事「三笑」を改編したか。

(3) 御苑や役所が植えた梅、杜甫「東閣官梅動詩興、還如何遜在揚州」(和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄)。

(7) 『莊子・大宗師』「玄冥聞之參寥、參寥聞之疑始」。また杭州智果寺にある泉の名、宋僧道潛別号參寥子が住居していた。交友関係を持った蘇軾は參寥子と詩の応酬が多

(4) 焦尾琴、また高雅な楽曲。後漢の蔡邕が焼け焦げた桐を用いて琴を作ったという。絶は弦を強く張ること。

11 易^ノ難^ノ山^ノ水^ノ富^シ 易難 山水の富 賢

賢

い。「号七」は不明。蘇軾は「新堤旧井各無恙、參寥六一豈忘吾」（喜劉景文至）と詠み、同じく杭州にある泉の名である「六一」と併称している。ここはその「六一」を「七」と改編したか。

(8) 櫓と燕の取り合わせとして杜甫「岸花飛送客、櫓燕語留人」（発潭州）などがある。

(9) ここは皇帝近侍の冠に飾る金貂か。南北朝丘遲の「奉璋峨峨、金貂濟濟」（藝文類聚・九日侍宴樂遊苑詩）。

21 諫履 与^ク其^ク進^ム 諫履 其の進まんに与せん 超

22 虚舟 所^ニ自^ラ漂^ル 虚舟 自ら漂ふ所 賢

23 蘆 交^テ漁^リ路^ヲ隘^シ 蘆交はりて漁路隘し 良

24 竹 密^ニ睫^ヲ峰^ニ遙^ク 竹密にして睫峰遙かなり 潤

25 坐^{スル} 我^ハ湘^ニ波^ニ簟^ニ 我を湘波に坐するは簟 御

26 飲^{シムル} 賢^ヲ魯^ノ巷^ニ瓢^ニ 賢を魯巷に飲ましむるは瓢 賢

27 鏡 明^ニ顔^ニ間^ニ出^ツ 鏡明にして顔は間かに出づ 雲

28 窓 破^テ孔^ヲ相^ニ邀^フ 窓破りて孔相邀ふ 良

29 花 被^テ煙^ニ脂^ニ染^ル 花は煙脂に染めらる 心

30 梨^ハ令^レ素^ク魄^ヲ描^カ 梨は素魄をして描かしむ 竹

(10) 諫履は用例が未見。前句の「貂」から為政者に諫めることが連想されたのは蘇秦のことか。「李兌送蘇秦明月之珠、和氏之璧、黑貂之裘、黄金百鎰。蘇秦得以為用、西入於秦」（戦国策・趙策）。

(11) 無人の舟。陶淵明「虚舟縦逸棹、回復遂無窮」（五月旦作和戴主簿）。

(12) 視野に入る峰の意か。宋积徳洪「絶景天蔵今日猷、千峰登豈豈人工」（次韻縱自亭）。

(13) 鏡に映る顔と前句「魯巷」の主人公である顔淵を兼ねる。「間出」は杜甫「異才復間出、周道日惟新」（別蔡十四著作）。

(14) 月光。南北朝蕭綱「夜輪懸素魄、朝光蕩碧空」（京洛篇）。月の光で梨の花が映える。

31 随^テ軒^ニ轡^ヲ送^ル客^ヲ 軒に随ひて轡は客を送る 齡

32 誦^メ根^ヲ利^ヲ除^ク袂^ヲ 根を誦じて利は袂を除く 節

33 芍^ハ地^ニ涌^ク菩^サ薩^ヲ 芍は地涌の菩薩 潤

34 糠^ハ村^ノ裏^ニ獨^シ獠^ヲ 糠は村裏の獨獠 雲

35 閑^ニ雲^ノ僧^ノ翳^レ眼^ヲ 閑雲 僧眼を翳す 超

36 傾^レ国 女 窮^ム妖 傾国 女妖を窮む

御

43 鹿^ト眠^テ星^ヲ可^シレ数^{ヘツ}

鹿眠りて星数へつべし

御

37 蝶^ト叫^テ黒^ク甜^ク苦^シ 蝶叫びて黒甜苦し

良

44 蜩^ト輩^ト暮^ニ無^シレ聊^ク

蜩輩暮れに聊しげ無し

澗

38 蟻^ト醇^シ黄^ト目^ヲ澆^ク

蟻醇にして黄目澆ぐ

心

45 冷^ク看^テ加^レ霜^ヲ鬢

冷看 霜を加ふる鬢

竹

39 掃^ヘ愁^ヲ心^ト即^シ仏 愁を掃へば心即仏

超

46 渥^ト恩^ヲ賜^フ露^ヲ瘡 渥恩 露を賜ふ瘡

渥恩 露を賜ふ瘡

雲

40 応^レ喚^ニ侍^ト寮 喚に応へて侍同寮

雲

47 覃^ヲ研^テ誰^カ慕^レ蘭 覃研 誰か蘭を慕ふ

覃研 誰か蘭を慕ふ

雲

(15) 随軒はまた随車といい、車に随つて時節に合つて雨が降ること、官が仁政を行う譬え(後漢書・鄭弘伝)。ただ

ここは鄭弘の故事ではなく、軒から眺める山巒も客人を送るようだという。

48 温^ク飽^ク共^ニ歌^フ菴 温飽 共に菴を歌ふ

温飽 共に菴を歌ふ

賢

(16) 『法華経』「有無量千万億、菩薩摩訶薩同時涌出」(従地涌出品第十五)。

50 粧^ト成^テ美^ト婦^ヲ嬌 粧ひ成りて美婦嬌たり

粧ひ成りて美婦嬌たり

心

(17) 獺。「伝灯録五祖謂六祖汝広南獺有甚仏性」(佩文韻府)。

(18) 寝ること。蘇軾「三杯軟飽後、一枕黒甜余」(筌広州)。

(19) 黄銅彝器。『夢溪筆談・器用』に「礼書所載黄彝、乃画人目為飾、謂之黄目」とみえる。ここは酒を盛る器の意か。

(20) 超仏越祖。蕙は六祖慧能を指すか。

(21) 芭蕉は脆い上、堅い実がないことから人生の無常を譬える。宋程俱「芭蕉中無堅、譬彼泡夢幻」(蝸廬有隙地三両席稍種樹竹已有可觀戲作七篇、其六芭蕉)。

(22) 研鑽すること。司馬相如は蘭相如を慕つて自らの名前も相如と変えた(史記・司馬相如列伝)。

(23) 堯の時に老人が歌い、後に明君の治世を称揚するとされている撃壤歌。謝靈運「即是羲唐化、獲我撃壤情」(初去郡詩)。

41 越^ト祖^ト罷^レ參^ヲ蕙 越祖 罷參の蕙

節

42 観^ス生^ヲ如^ク幻^ノ蕉 生を観ず 如幻の蕉

雲

(24) 徴斂、徴税の意か。元沈石「県官薄税斂、田野足耕桑」

(中酒雜詩四句五首、其五)。

51 誅_ス楓_ヲ紅_レ活_一套_ニ 楓を誅す 紅活套₍₂₅₎ 良

52 携_フ杖_ヲ景佳_一招_ニ 杖を携ふ景は佳招₍₂₆₎ 竹

53 雁_一字_ハ凌雲_ノ賦_ニ 雁字は凌雲の賦₍₂₇₎ 御

54 蛮_一音_ハ擊壤_ノ謠_ニ 蛮音 擊壤の謠₍₂₈₎ 雲

55 文_一光_ハ威_レ德_ヲ 文光₍₂₉₎ 威徳を光す 齡

56 物_一産_ニ産_ニ豊饒_ヲ 物産 豊饒を産す 心

57 隱_一理_事無_一碍_ニ 隱は理事無碍 竹

58 叢_一規_矩有_一条_ニ 叢は規矩条有り 雲

59 開_レ基_ヲ綿_一蕪_ノ野_ニ 基を開く 綿蕪の野₍₃₀₎ 澗

60 通_レ里_ニ素_一書_ノ潮_ニ 里に通ず 素書の潮₍₃₁₎

(25) 不詳。後考を待つ。

(26) 佳招、風雅な会への誘い。虎関師鍊「厳行正令少青眸、屢斥佳招已白頭」(秀首座挽歌、其二)。

(27) 司馬相如が「大人賦」を作り漢武帝に献上したところ、

「天子大悦、飄飄有凌雲氣遊天地之間意」(漢書・司馬相如列伝)という。

(28) 擊壤歌は48句に既出。

(29) 前漢文帝と後漢光武帝との併称。「鑑武穆、憲文光」(文選・赭白馬賦)。

(30) 札楽を整え、朝儀を整備すること。「(叔孫通)遂与所徵三十一西、及上左右為学者与其弟子百余人為綿蕪野外」(史記・劉敬叔孫通列伝)。

(31) 尺素書、手紙。『文選・古樂府』「客從遠方來、遺我双鯉魚。呼兒烹鯉魚、中有尺素書」(飲馬長城窟行)。

61 慚_ハ白_一蹈_ニ鞋_一債_ニ 白蹈₍₃₂₎に慚づるは鞋債 超

62 甘_ハ塩_一味_ヲ鼎_一調_ニ 塩味を甘くするは鼎調₍₃₃₎ 節

63 他_一郷_ニ惟_一肖_{タリ}嶂_ニ 他郷 惟だ肖たり 嶂₍₃₄₎ 賢

64 快_一霽_ニ仰_ハ高_一霄_ニ 快霽 仰げは高し 霄 御

65 猿_一哭_ニ楚_一襟_ニ湿_フ 猿哭して楚襟湿ふ₍₃₅₎ 心

66 鷺_一行_ニ藍_一玉_一珮_ニ 鷺行きて藍玉珮る 節

67 筆_一耕_ニ田_一在_レ籍_ニ 筆耕 田籍₍₃₆₎に在り 竹

68 棹_一唱_ニ浪_一鳴_レ橈_ニ 棹唱 浪橈を鳴らす 齡

69 南₁海₁萍₁遊₁愈₁ 南海 萍遊の愈₍₃₇₎

雲

73 班₁衛₁斐₁君₁子₁ 班は衛の斐たる君子

御

70 西₁崑₁篇₁集₁了₁ 西崑 篇集の了₍₃₈₎

心

74 巖₁劉₁彼₁久₁要₁ 巖は劉彼の久要

良

(32) 白踏は用例未見。進軍の道を確認拓く「踏白」か。蘇軾「雲間踏白看纒旗、莫忘西湖把酒時」(坐上復借韻送

崑嵐軍通判叶朝奉)。

(33) 食事の調理、また宰相を務め国家を収めること。孟浩然

「未逢調鼎用、徒有濟川心」(都下送辛大之鄂)。

(34) よく似ていること。傳説の故事、「説筑傳巖之野、惟肖爰立作相、王置諸其左右」。前句の「調鼎」からの連想。

(35) 「扞楚王襟」が想起されるが、ここは典拠の利用ではない。「楚襄王遊於蘭台之宮。宋玉景差侍。有風颯然而至、王乃披襟而当之曰、快哉此風、寡人所与庶人共者邪」(文選・風賦)。

(36) 典籍が筆耕の田。黄庭堅「公今未有田、把筆耕六籍」(次韻子瞻和王子立風雨敗書屋有感)。なお田は、前句に含まれる地名藍田から。

(37) 韓愈が南方潮州に貶謫された経験を指す。「嗟我擯南海、無由助飛鳴」(贈別元十八協律六首、其五)。

(38) 了が指す人物は不明。西崑は宋初の詩体、温庭筠、李商

隠を範とする。

71 寒₁哦₁詩₁体₁洪₁ 寒哦 詩体洪る

72 閨₁怨₁別₁魂₁消₁ 閨怨 別魂消す

節

(42) 鄭州、陝西省北部にある地名。杜甫「今夜鄭州月、閨中只独看」(月夜)。

73 班₁衛₁斐₁君₁子₁ 班は衛の斐たる君子

雲

(41) 鑑はくつわ、出征の馬をいう。欧陽脩「林鴉棲已定、独此倦征鑑」(巩県陪祭献懿二后回義橋道中作)。

(40) 蔽光のこと。「蔽光字子陵、一名遵、会稽余姚人也。少

有高名、与光武同遊学。及光武即位、乃变名姓、隱身不見」(後漢書・逸民列伝)。久要は旧友。「久要不可忘、薄終義所尤」(文選・筮葆引)。

(39) 不明。

80 競₁渡₁至₁帰₁樵₁ 渡を競ひて至るは帰樵

79 先₁秋₁零₁涙₁葉₁ 秋に先んじて涙葉を零す

78 郵₁平₁生₁独₁宵₁ 郵は平生独宵

77 蜀₁十₁步₁千₁嶮₁ 蜀は十步千嶮

76 勝₁境₁駐₁征₁鑑₁ 勝境 征鑑を駐む

81 親^レ且^ツ旧^キ 旧^キ 鷗^ハ 社 親にして且つ旧きは鷗社 良

82 惠^レ堪^ル 懷^ル 燕^ニ 朝 惠懐くに堪えたるは燕朝 澗

83 月^リ 孤^リ 何^ソ 隔^レ 野^ノ 月独り何して野を隔てん 竹

84 涼^ク 嫩^ク 暫^ク 忘^ル 歎^ラ 涼嫩くして暫く歎を忘る 超

85 法^ノ 霈^ハ 雨^ハ 円^ノ 頓 法霈の雨は円頓 御

86 恒^レ 河^ノ 沙^ノ 劫^ノ 燒 恒河沙の劫燒 節

87 学^ニ 淵^ニ 難^シ 徹^シ 底^ニ 学淵 底に徹し難し 澗

88 卒^ニ 士^ニ 以^テ 知^ラ 徹^ラ 卒士 徹を知ることを以てす 心

89 文^ノ 圜^ノ 能^ク 馴^ル 兔^ノ 文圜 能く馴るる兔 節

90 趙^ノ 州^ノ 在^ハ 救^ハ 猫^ノ 趙州 在らば救はん猫 御

(43) 古代の天子諸侯が路寝(正殿)で臣下を接見すること、また公事を執り行つた後の休息の場所。宋劉克莊「明揚雖曰由師錫、密啓端因侍燕朝」(丞相信庵趙公哀詩五首、其五)。

(44) 歎は暑熱。歐陽脩「荒城繁草樹、早氣飛炎歎」(憎蚊)。
(45) 円頓戒、天台宗の戒法。圓融諸法、頓速成仏の意。

(46) 壞劫(世界が破滅する時期)の大火災。「仮使劫燒、担負乾草」(法華經)。

(47) 「圜」の字と関連して兔園が意識されたか。「梁王不悅、遊於兔園」(文選・雪賦)。また兔は毛筆をいう。文圜は文学を収める場所、文章の林圜。『文選』序に「余監撫余閑、居多暇日、歴觀文圜、汎覽辭林」とみえる。

(48) 『碧巖録・第六三』

91 泉^ニ 枯^ニ 琴^ニ 拱^ス 手^ヲ 泉枯れて琴は手を拱す 超

92 県^ノ 令^ニ 禄^ニ 全^ス 腰^ヲ 県の令 禄は腰を全す 澗

93 栽^テ 菊^ヲ 樊^カ 籬^ノ 廢^ラ 菊を栽えて籬の廢れたるを樊ふ 齡

94 結^テ 茅^ヲ 避^ス 世^ノ 囂^ヲ 茅を結びて世の囂しさを避く 良

95 面^ニ 交^テ 還^テ 厭^レ 問^ヲ 面交 還りて問を厭ふ 雲

96 悖^レ 礼^ヲ 孰^カ 宣^レ 驕^ヲ 悖礼 孰れか驕を宣ふ 御

97 易^レ 濁^リ 容^ル 胸^ノ 漚^ヲ 濁り易きは胸を容るる漚 心

98 弄^ス 晴^ヲ 縦^レ 目^ヲ 瀟 晴を弄す 目を縦にする瀟 賢

99 献^レ 筐^ヲ 夷^ヲ 解^ク 辯^ヲ 筐を献して夷辯を解く 節

100 拝冕各望杓

冕を拝して各杓を望む

竹

4 馬白阮青茅

馬白 阮青の茅

外

(49) 泉の音が琴と譬えられる。杜甫「石影銜珠閣、泉声帶玉琴」(記鄭南毗)。泉が枯れたため美しい音色が絶えたので、まるで琴を弾く手を拱いたようだ。

(50) 陶淵明が彭沢県令を務めた時「我不能為後五斗米折腰」と言い辞官して帰郷した。ここでは腰を折り曲げるのを免れたという意。

(51) 驕奢。「維彼愚人、謂我宜驕」(詩経・子雅・鴻雁)。

(52) 渭水が常に濁るといふ。杜甫「去馬來牛不復辨、濁渭清渭何当分」(秋雨嘆三首、其二)とされるが、一方、実は涇水が清く、渭水が濁るといふ。「涇以渭濁、湜湜其沚」(詩経・穀風)。

(53) 辮髪を解く。蘇軾「威行烏白蚤、解辮請冠裾」(答任師中、家漢公)。筐は筐篋、贈り物の意。

(54) 北斗七星の第五から第七にいたる三星。斗柄。欧陽脩「寄信無秋雁、思婦望斗杓」(初至夷陵答蘇子美見寄)。

看第三 慶長十九年正月二十七日

1 花有泰平象 花に泰平の象有り

2 堯紅舜紫梢 堯紅 舜紫の梢

緒

3 月は応に同宿の故なるべし

(1) 宿泊をとにもすること。1と2からなる一聯は、花の梢が紅や紫に彩り、それは堯舜による治世の表れである、という意に対して、対偶する3と4からなる一聯は、月に照らされる茅が白や青に映え、それは馬良と阮籍が親しく同宿したからである、という。

(2) 馬良の眉に白い毛があることから白眉と称された。「馬良字季常、襄陽宜城人也。兄弟五人、併有才名、郷里為之諺曰馬氏五常、白眉最良。良眉中有白毛、故以称之」(三国志・馬良伝)。「阮籍は相手によって青眼また白眼を以て区別して接した。「籍又能為青白眼、見礼俗之士、以白眼对之。及嵇喜来吊、籍作白眼、喜不懼而退。喜弟康聞之、乃賚酒携琴造焉、籍大悦、乃見青眼」(晋書・

10 電声棋手敵

電声 棋は手づから敵く

寿洪

9 澗愧松僵臥

澗の愧 松は僵れ臥す

竹

8 夜鶴隱譏嘲

夜鶴 隱は譏り嘲る

澗

7 風蟬泉迸出

風蟬 泉は迸り出づ

雲

6 祭如在夏郊

祭ること 在すが如くは夏郊

節

5 聽漸稀春雪

聴くこと 漸く稀なるは春雪

御

阮籍列伝)。馬良と阮籍を取り合わせた例として、許渾「馬氏識君眉最白、阮公留我眼長青」(下第貽友人)等がある。

(3) 白居易「留連向暮婦、樹樹風蟬聲」(秋遊原上) など、秋風とともに聞こえる蟬の声。

(4) 「澗松」という詩語があり、澗底たにに生える松の意で、才徳を備えるも官位が卑い人物を譬える。ここでは境遇に恵まれない松が更に倒れているので、澗としても羞じてしまうという。蘇軾「君才不用如澗松、我老得全猶社櫟」(次前韻送程六表弟)。

(5) 碁を打つ音を雹が降ることに譬える。黃庭堅「談犀振清風、棋局落秋雹」(將帰叶先寄明復季常)。また逆に落雹を碁と譬えることもある。黃庭堅「日永清風揺塵尾、夜闌飛雹落棋枰」(呈馬粹老範德孺)。

11 六朝は仙の一刻

12 外水は我が空庖

13 算を埋めて苔茂るを行ぬ

14 瓊を依りて兼交はりを結ぶ

15 棹歌は塵に旅枕をす

16 詩味は嘉肴に代ふ

17 透は優の三関を透る杜

18 劉の太子に授かるは包

19 仏書は論の半部

20 臣位は易の重文

(6) 蘇軾「空庖煮寒菜、破灶燒濕葦」(寒食雨二首、其二)。

(7) 兼葭は賤しい水草、瓊は高貴な美玉。白居易「但恐持相並、兼葭瓊樹枝」(和微之道保生三日)。ここでは両者が絡み合うことをいう。

(8) 舟歌によつて旅人の眠気が追い払われた。黃庭堅「市声塵午枕、常以此心觀」(平陰張澄居士隱処三詩、其一)。

(9) 唐代画家の韋偃か。西胤俊承「郭熙骨俱冷、異跡猶分前後身」(真愚稿)など、五山禪僧に知られた。杜甫に「戲為韋偃双松図歌」がある。「三関」は兜率三関(無門関・四十七)、一鏃破三関(碧巖録・五十六)など。宋王之望「万仞峰頭曾進歩、禪機一撥透三関」(和制帥)。こ

こは杜甫が韋偃の絵画をよく理解している意か。

(10) 包咸、『論語章句』を著す。「建武中、入授皇太子論語、又為其章句」(後漢書・包咸伝)。

(11) 「論」は『論語』。宋の宰相趙普は読書が『論語』の半分しかないと言われる。

(12) 「易」は『易経』。「重文」は六十四卦をいう。ここは周の文王が占いで太公望こと呂尚に出逢ったことをいう

か。

21世^ハ祝^メ龜^ノ齡^ヲ筭^フ 世は龜齡を祝して筭ふ

22室^ハ胡^ニ一^{ナリト}蛇^毒一^ヲ抛^ツ 室は蛇毒を胡なりとして抛つ

23愛^メ眠^ヲ僧^ノ静^ヲ退^ス 眠を愛して僧は静退

24覃^メ思^ヲ妾^ノ紛^ヲ殺^ス 思を覃くして妾は紛殺

25虚^ハ席^ヲ以^テ年^ヲ計^ル 虚席 年を以て計る

26残^ハ篇^ノ和^メ露^ニ抄^ス 残篇 露に和して抄す

27盃^ヲ移^シ風^ヲ白^ク俗^ク 盃ぞ風を移さんや 白俗

28僭^シ乱^ル国^ヲ黄^ク巢^ク 僭して国を乱るは黄巢

29盛^ク晚^ク唐^ノ如^ク箭^ノ 盛晚 唐は箭の如し

30宮^ノ商^ノ漢^ノ献^ス膠^ヲ 宮商 漢は膠を献ず

(13) 紛殺は詩語の用例が未見。乱れることか。『聚分韻略』に「殺 潤一 雜也」とある。

(14) 空席。席を空けて賢者を待つことをいうことが多い。ここでは前句を受けて恋人が久しく訪ねてきていないこ

と。禅籍にも多くみえる。『石門文字禪』「大觀元年、京師大法雲寺、虚席有司以公有道行、請于朝、願令繼嗣住持」など。

(15) 蘇軾「元輕白俗、郊寒島瘦」（祭柳子玉文）。氣風や習慣を変へる意味の「易俗移風」を重ねる。

(16) 西海に鳳麟洲あり、仙家は鳳喙と麟角を以て膠を作り、湯弓の弦を繋ぎ決して断たないという（博物誌）。黄庭堅「引之入漢朝、誰為統弦膠」（次韻楊明叔見餞十首、其一）。

31雲^ノ梯^ノ虹^ノ統^ク断^ス 雲梯 虹は断たるを続く

32洛^ノ邑^ノ地^ヲ除^ク炮^ヲ 洛邑 地は炮を除く

33淚^ノ葉^ノ未^ダ秋^ナ脆^シ 涙葉 未だ秋ならざるに脆し

34吟^ノ節^ノ有^レ景^ノ饒^フ 吟節 景有れば饒ふ

35禁^ノ園^ノ無^ク所^ノ苟^ム 禁園 苟もする所無し

36聖^ノ道^ノ忽^チ相^チ教^ユ 聖道 忽ち相教ゆ

37湯^ハ革^ム殷^ノ兼^ト命^ヲ 湯は殷と命とを革む

38結^ハ銘^ス樊^ト与^ト馨^ト 結は樊と馨とを銘す

39 醉^ニ顔^ニ疑^フ益^ト壯^ト 醉顔 益壯かと疑ふ

40 麗^ク質^ヲ寵^テ于^ニ喉^ニ 麗質 喉に寵あり

(17) 周王朝の都洛陽の旧称。殷の紂王が炮烙また炮烙という
厳刑を用いて人に焼けどを受けさせた。ここではそのよ
うな殷の厳刑が除かれたと詠む。

(18) あらそう。囀しいさま。蘇軾「讒譏訴我庭、慷慨驚吾僚」
(劉醜斯詩) など。ここは景色に触発されて詩を吟じる
ことしばしばの意であろう。

(19) 周王朝が殷を倒したこと。第32句の注に既出。

(20) 唐元結、「既客禁上、漫逐頭。禁左右皆漁者、少長相戯、
更曰警叟」(新唐書・元結列伝)。

41 霜^ハ尚^レ綱^ヲ楓^ノ錦^ニ 霜は綱を尚にする楓錦

42 颺^ハ抛^シ筥^ヲ荀^ノ苞^ニ 颺は筥を抛しむ荀苞

43 瀑^ノ音^ヲ窓^ノ日^ヲ雨^ニ 瀑音 窓雨ふると曰ふ

44 旧^ノ面^ヲ硯^ヲ成^ス坳^ニ 旧面 硯は坳を成す

45 雁^ノ字^ヲ戲^シ鴉^ノ墨^ニ 雁字 鴉墨に戯ぶる

46 鹿^ノ才^ヲ慚^ツ斗^ノ筥^ヲ 鹿才 斗筥を慚づ

47 盃^ノ天^ノ偏^ノ小^ノ魯 盃天 偏小の魯

48 函^ノ谷^ノ四^ノ困^ノ嶠 函谷 四に困む嶠

49 鉄^モ不^レ如^ク愁^ト羸 鉄も如ざるは愁羸

50 未^ハ将^ニ積^ム瘠^ト境^ニ 未は将に積んとするは瘠境

(21) 衣錦尚綱、華美な衣服の上に粗末な打ち掛けを重ね、転
じて才能や徳を隠すこと。朱熹「中庸首謹独、衣錦思尚
綱」(齋居感興二十首、其十三)。

(22) 荀況とその門人の荀丘氏。

(23) 才能が乏しく器量の無い人。『論語・子路』「今之從政者
如何。子曰、噫、斗筥之人、何足算也」。

(24) 土地が瘦せること。陸游「磽瘠財三畝、勤劬頼兩奴」(蔬
圃)とある。

51 鳩^ノ呼^ハ農^ノ答^ヲ顧^ニ 鳩呼べば農顧に答ふ

52 鯨^ノ響^キ客^ノ嫌^ム 鯨響きて客嫌しきことを嫌ふ

53 仮^ノ寐^ニ永^ク郷^ノ邦^ニ 仮寐にも永らふるは郷邦

54 蹇^ト然^ト来^テ曉^ノ猜^ニ 蹇然として来るは曉猜

55 拾^テ閑^ヲ顛^ニ意^ヲ足^ル 閑を拾ひて顛意足る

56 統^テ古^コ憲^{ケン}量^{リヤウ}滄^{ソウ} 古を統めて憲量滄る 雲

57 湘^ハ筆^{ヘツ}間^{カン}千^{セン}頃^{ケイ} 湘は筆間千頃 外

58 峯^ハ壺^ウ中^{チュウ}聳^{ソウ}嶸^{リョウ} 峯は壺中聳嶸 雲

59 脱^{ダツ}機^キ経^{ケイ}緯^{レイ}徳^{トク} 機を脱す 経緯の徳 御

60 提^{テイ}勒^{レツ}射^{シャ}騎^キ散^{サン} 勒を提ぐ 射騎の散 外

(25) 南^{ナン}朝^{テウ}宋^{ソウ}の戴^{ダイ}顛^{テン}、「父^フ遼^{リョウ}、兄^{ケイ}勃^{ハツ}、並^ニ隱^{イン}遁^{トン}有^ユ高^{カウ}名^{メイ}」(宋^{ソウ}書^{ショ}・隱^{イン}逸^{イツ}伝^{デン})。

(26) 後^コ漢^{カン}黄^{ワウ}憲^{ケン}の器^キの広^{コウ}さが量^{リヤウ}り難^{ナン}いこと。『世^セ説^{セツ}新^{シン}語^ゴ』に「叔^{シュク}度^ト汪^{ワウ}如^ニ万^{マン}頃^{ケイ}之^シ陂^ヒ。澄^{テイ}之^シ不^フ清^{セイ}、擾^{ニョウ}之^シ不^フ濁^{ダク}。其^キ器^キ深^{シン}広^{コウ}、難^{ナン}測^{ソク}量^{リヤウ}也^ニ」(徳^{トク}行^{コウ})とある。

(27) 山^{サン}の高^{カウ}く聳^{ソウ}え立^{タツ}つ様^{ヤウ}。「聳^{ソウ}嶸^{リョウ}」で用例は未^ミ見^{ケン}。唐^{テイ}元^{ゲン}結^{ケツ}「九^ク疑^キ千^{セン}万^{マン}峰^{フウ}、嶸^{リョウ}天^{テン}外^{ガイ}青^{セイ}」(登^{テイ}白^{ハク}雲^{ウン}亭^{テイ})。前^{ゼン}句^{コウ}57は瀟^{シウ}湘^{ハウ}八^{ハツ}景^{ケイ}、こ^コこは西^{セイ}岳^{ゲツ}華^カ山^{サン}で対^{タイ}偶^{コウ}す。

(28) 勒^{レツ}はおもが^ガい、くつ^ツは^ハみ。

61 逐^{テツ}匹^{ヒツ}及^キ回^{クワイ}臭^{クワイ} 逐^{テツ}へども及^キび匹^{ヒツ}ふは回^{クワイ}臭^{クワイ} 廣

62 仰^{テイ}弥^{メイ}高^{カウ}、孔^{コウ}沂^イ 仰^{テイ}ぎて弥^{メイ}高^{カウ}きは孔^{コウ}沂^イ 潤

63 翻^{フアン}巢^{サウ}争^{ソウ}乳^{ニウ}燕^{エン} 巢^{サウ}を翻^{フアン}す 乳^{ニウ}を争^{ソウ}ふ燕^{エン} 雲

64 潜^{セン}窟^{クツ}窟^{クツ}化^カ翁^ウ蛟^{コウ} 窟^{クツ}に潜^{セン}む 翁^ウと化^カするは蛟^{コウ} 潤

65 笛^{テツ}裏^リ嘆^{タン}梅^{メイ}落^{ラク} 笛^{テツ}裏^リ 梅^{メイ}の落^{ラク}つるを嘆^{タン}す 外

66 簾^{レン}前^{ゼン}翫^{ケン}桂^{クイ}窗^{ソウ} 簾^{レン}前^{ゼン} 桂^{クイ}の窗^{ソウ}なるを翫^{ケン}ふ 御

67 永^{エイ}宵^{ソウ}逢^{フウ}逢^{フウ}語^ゴ短^{タン} 永^{エイ}宵^{ソウ} 逢^{フウ}ひて語^ゴれば短^{タン}し 緒

68 異^イ域^{イク}善^{ゼン}謀^{ボウ}撓^{ニョウ} 異^イ域^{イク} 善^{ゼン}謀^{ボウ}りて撓^{ニョウ}ます 廣

69 帰^キ厚^{コウ}移^イ家^カ野^ノ 厚^{コウ}に帰^キす 家^カを移^イす野^ノ 竹

70 没^{ボツ}蹤^{ソウ}浮^フ海^{カイ}泡^{ポウ} 蹤^{ソウ}を没^{ボツ}す 海^{カイ}に浮^フく泡^{ポウ} 良

(29) 周^{シュウ}紫^シ臣^{イン}「回^{クワイ}臭^{クワイ}比^ヒ黠^{シヤク}香^{コウ}、位^イ卑^ヒ道^{トウ}仍^{ニョウ}尊^{ソウ}」(十二^{ジュニ}月^{ゲツ}二十^{ニジュ}六^{ロク}日^{ニチ}北^{ホク}牆^{キヤウ}捫^{ブン}蚤^{ソウ})。非^ヒ道^{トウ}極^{キョク}惡^{オウ}だ^ダが長^{チャウ}生^{セイ}き^キした盜^{トウ}蹤^{ソウ}に比^ヒべて、有^ユ徳^{トク}だ^ダが早^{ソウ}世^セした顔^{ガン}回^{クワイ}のことか。こ^コの故^コ事^ジの用^{ユウ}例^{レイ}は本^{ホン}書^{ショ}に数^{スウ}度^ト見^{ケン}ら^ラれる。「臭^{クワイ}」は具^ク体^{テイ}的^{テキ}に何^{ナニ}を指^シすか不^フ明^{メイ}。ま^マた「匹^{ヒツ}及^キ」も後^コ考^{コウ}を待^{マツ}つ。

(30) 『玉^{ジュ}篇^{ペン}』に「頭^{トウ}凹^ウ也^ニ」とみえ、孔^{コウ}子^シは「生^{セイ}而^ニ首^{シュ}上^{ジョウ}圩^{クワイ}頂^{テイ}、故^コ因^{イン}名^{メイ}孔^{コウ}丘^{キウ}」(史^シ記^キ・孔^{コウ}子^シ世^セ家^カ)と^トい^ウう。

(31) 蛟^{コウ}が老^{ラウ}翁^ウに^ニ変^{ヘン}身^{シン}す。明^{メイ}の袁^{エン}凱^{カイ}に詩^シ「題^{テイ}老^{ラウ}蛟^{コウ}化^カ江^{カウ}叟^{ソウ}吹^{フイ}笛^{テツ}図^ズ」が^ガあ^アる。

(32) 楽^{ラク}曲^{キョク}。李^リ白^{ハク}「黄^{ワウ}鶴^{コク}楼^{ロウ}中^{チュウ}吹^{フイ}玉^{ジュ}笛^{テツ}、江^{カウ}城^{セイ}五^ゴ月^{ゲツ}落^{ラク}梅^{メイ}花^カ」(与^ユ史^シ)

(33) 目^メが窪^{クワ}むこ^コと、ま^マた深^{シン}遠^{エン}な様^{ヤウ}。桂^{クイ}と^トの取^クり合^カわ^ワせ^セは『前^{ゼン}』

漢礼楽志』「宵瓠桂華、孝奏天儀」など。

(34) 『論語・学而』「慎終追遠、民德歸厚矣」。

(35) 『論語・公治長』「道不行、乘桴浮於海、從我者、其由与」。吳融「絶蹤思浮海、修書懶寄秦」(荊州寓居書懷)。

71 江一煙 沾^{ニス}釣^リ笠^ヲ 江煙 釣笠を沾す 重

72 塵^チ界^カ惡^ム懸^ニ匏^ト 塵界⁽³⁶⁾ 懸匏を惡む 洪

73 圩^ウ戸^コ禳^{ハレ}田^ニ賑^シ 圩戸⁽³⁷⁾ 田に禳ひして賑し 雲

74 早^サ霖^{リン}隔^テ壁^ヲ抓^ク 早霖 壁を隔てて抓く 外

75 池^チ枯^カ蓮^{レン}拗^レ折^ル 池枯れて蓮は拗折 溪

76 寒^{サム}重^メ栢^{ハク}魚^イ俵^{ヒョウ} 寒重くして栢は魚俵⁽³⁸⁾ 良

77 炉^ロ話^ワ陽^ニ頻^ニ復^ル 炉話 陽頻りに復る⁽³⁹⁾ 洪

78 鋒^{ホウ}讒^{セン}日^ニ蔽^ヒ絞^メ 鋒讒⁽⁴⁰⁾ 日に蔽ひ絞ふ 外

79 煤^ヒ蠅^{ロウ}蠅^{ロウ}翊^ト 煤は蠅蠅翊⁽⁴¹⁾ 御

80 鳥^{トリ}鶴^ト鶴^ト咬^ム咬^ム 鳥は鶴鶴咬咬⁽⁴²⁾ 良

(36) 色・声・香・味・触・法の六塵から構成される世界が塵

界。蘇軾「黙坐閑塵界、往来八十反」(乞数珠贈南禅湜老、其一)。

(37) 圩田を耕す家。黄庭堅「嵐抱豊圩戸、桁楊臥訟庭」(送舅氏野夫之宣城二首、其二)。

(38) 暴威を奮う。『詩経』「文王曰咨、咨女殷商。女忽休于中国、斂怨以為德」(大雅・蕩之什)。

(39) 劉敞「陽微怯頻復、陰老恣驕雄」(奉同隣幾詠雪)。

(40) 讒鋒に同じか。宋陳造「更惜讒鋒發蘭尚、祇今日月炳駱経」(石城)。

(41) 虫の動く様子。『文選』「螻蟻蠅蜒、蠅蠅翊翊」(洞簫)。

(42) 鳥の鳴く声。『文選』「采采麗容、咬咬好音」(鸚鵡賦)。

81 樵^{セウ}徑^{キョウ}知^ル還^ル倦^ム 樵徑 還ることを知りて倦む 澗

82 雄^{ユウ}樓^{ロウ}施^シ巧^ク摩^シ 雄樓 巧を施して摩し⁽⁴³⁾ 廣

83 霧^キ開^キ山^{サン}塊^{クワイ}圯^イ 霧開きて山塊圯⁽⁴⁴⁾ 御

84 湖^コ淨^{ジュウ}影^{エイ}妍^{ケン}姣^{カウ} 湖淨くして影妍姣 竹

85 鷗^ウ舞^ブ漁^イ遊^ユ目^メ 鷗舞ひて漁は目を遊ばしむ 雲

86 卵^{ラン}生^{セイ}朧^{ロウ}托^{トク}朧^{ロウ} 卵生 朧は朧に托す 澗

87 人^{ニン}情^{セイ}皆^ハ阿^ア魏^{エイ} 人情は皆阿魏⁽⁴⁵⁾ 外

88 姦^レ倭、總^ス昏^レ悵^ト 廣 姦倭は總に昏悵⁽⁴⁶⁾

89 篠^レ籟^ト驚^ス幽^レ夢^ト 緒 篠籟 幽夢を驚かす

90 菓^レ方^ト療^ス病^ト脬^ト 御 菓方 病脬⁽⁴⁷⁾を療す

(43) 序^レし、宮殿の高く聳える様(集韻)。柳宗元「西亭構其巔、反宇臨呀序」(遊朝陽巖登西亭詩)。

(44) 塊^レ坳^ト、広大で限りない様。『史記・屈原賈生列伝』「大專槃物兮、塊坳無限」。また高低平らかではない様。韓愈「塊坳遊峽喧、颺颺臥江汰」(秋雨聯句)。

(45) 臭気を持つ菓草。貫休「茶和阿魏暖、火種柏根馨」(桐江閑居作十二首、其二)。

(46) 昏悵は昏悵と同じか。紛争、『詩経・大雅』「無縱詭隨、以謹昏悵」(民勞)。「總」は「つねに」と訓むべきか。

(47) 患った膀胱か。『史記・扁鵲倉公列伝』「風痺客脬」。

91 秋^レ心^ト先^レ進^ス蟀^ト 良 秋心 先に進むは蟀

92 爽^レ氣^ト飽^ス颺^ス鵬^ト 雲 爽氣 飽は颺る鵬

93 歴^レ灑^ス刷^ス船^ト翼^ト 溪 灑を歴て船翼を刷ふ

94 宮^レ韓^ト縮^ス鏡^ト賀^ト 洪 韓を宮みて鏡賀を縮ぬ

95 醜^レ枝^ト華^ト傳^ス粉^ト 澗 醜枝 華粉を傳く

96 修^レ竹^ト翠^ト擊^ス寶^ト 廣 修竹 翠寶を撃く

97 蚩^レ濕^ス纒^ト搜^ス說^ト 外 蚩湿りて纒に説を搜る

98 虎^レ威^ト闕^ス畏^ス虓^ト 竹 虎威 闕として虓るるを畏る

99 時^レ和^ス民^ト每^ニ拊^ト 御 時和して民毎に拊つ

100 市^レ富^ス士^ト誇^ス嘍^ト 重 市富みて士誇り嘍く

(48) 鵬^レは鷹。宋の彭子翔「莫養鷹、飢則附人飽颺去」(莫養鷹)。

(49) 何晏傳粉の故事。『世說新語』「何平叔美姿儀、面至白。魏明帝疑其傳粉」(容止)。前句94の「宮韓」は不明であるが、同じく『世說新語』を出典とするなら韓寿の故事がある。韓寿は容姿優れるが、鏡に映る描写はない。

(50) 『詩経』「進厥虎臣、闕如虓虎」(大雅・常武)。

(51) 歌舞の拍子を取るなど、手をたたくこと。曹植「楽人舞鼙鼓、百官雷抃贊若驚」(鼙舞歌五首、其二)。

(52) 『孟子・尽心下』「何以謂之狂也。曰、其志嘍嘍然、曰古之人古之人」。ここで「誇嘍」も驕つて放言すること。

豪第四 慶長十九年七月二十六日

1 雲^レ際^ト窺^ス樓^ト月 雲際 樓を窺ふ月

2 仰^ハ弥^ク秋^ノ色^{高シ} 潤 12 涇^ノ濁^ノ渭^ノ清^ノ篙^良 涇濁 渭清は篙

3 栖^シ遲^レ聴^ク雨^ノ夜^重 栖^シ遲^レ 雨^ヲを聴^ク夜^重 13 釣^ル位^ヲ餌^ニ仁^ヲ呂^重 位^ヲを釣^ル 仁^ヲを餌^ニにする呂

4 楽^シ只^シ世^ノ塵^ヲ逃^ル 雲 14 網^ヲ宗^ヲ牆^ニ面^ニ陶^潤 宗^ヲを網^シして面^ニに牆^ヲする陶

5 鐘^ヲ臥^シ続^ク閑^ノ夢^ヲ 岳 15 聯^テ芳^ヲ僧^ノ宝^ヲ菊^雲 芳^ヲを聯^テぬ 僧^ノ宝^ノの菊

6 帖^ニ真^ニ画^ニ健^ニ毫^ヲ 節 16 索^テ笑^テ独^ノ尊^ノ桃^岳 笑^ヲを索^テむ 独^ノ尊^ノの桃

7 方^ノ池^ヲ延^ク寿^ノ硯^節 峰 17 易^ク地^ヲ眼^中竺^節 地^ヲを易^クふ 眼^中の竺

8 積^リ雪^ヲ読^ク書^ノ膏^峰 昌^ノ渭^峰 18 蓋^テ天^ヲ胸^次菽^峰 天^ヲを蓋^テふ 胸^次の菽

9 風^ノ竹^ヲ蒼^ク煙^ヲ簇^ル 御 19 霜^ノ余^ノ山^ヲ打^ク睡^御 霜^ノ余^ノ 山^ヲは打^ク睡

10 庭^ノ松^ノ杜^ノ宇^ノ囂^御 庭^ノ松^ノ 杜^ノ宇^ノ囂^御 20 澆^ノ季^ノ道^ノ奢^ノ豪^御 澆^ノ季^ノ 道^ノは奢^ノ豪

(1) 蘇軾「酒醒風動竹、夢斷月窺樓」(次韻陽行先)。

(2) 遊息、また漂泊失意。『詩経・衡門』「衡門之下、可以棲遲」。

(3) 灯の油、蘭膏。「蘭膏明燭、華容備些」(楚辞・招魂)。
蘇軾「十年読易費膏火、尽日吟詩愁肺肝」(送蜀僧去塵)。

(4) 淮河の色、孟郊「江湖清翻翻、淮潮碧徐徐」(忽不貧喜廬全書船帰洛)など。楚青とは楚の山また木々の色。権徳興「月暁蜀江迴、猿啼楚樹青」(送陸拾遺祇召赴行在)。
(5) 学ばずして不知なること。『書経』に「不学牆面、莛事惟煩」(周官)。ただしここは面壁の意で達磨祖師のことを以て陶淵明を詠むか。

(6) 諸共に花を咲かせること。仁如「欲知始祖单伝旨、五葉聯芳自一花」(津陽高槻村槐林禅寺者(以下略))。僧宝

11 楚^ノ青^ノ淮^ノ碧^ノ昼^竹 楚^ノ青^ノ 淮^ノ碧^ノは昼

は僧衆のこと。

(7) 廬山。秦の博士である廬敖が専横な始皇帝を避けて故山に隠遁した。後に故山が廬山と改名された。蘇軾「我欲贏糧往問道、未忘拳臂辭廬敖」(趙問道高齋)。ここは廬山の高さをいう。

(8) 霜が降る冬の山は眠るようだ。郭熙「冬山慘愴而如睡」(山水訓)。

(9) 道徳の乱れた末世。瑞溪周鳳「六籍一秦澆季年、常愁竹帛化成煙」(心田重和禪字韻十首見寄)。ここは宗教界の墮落を戒めたものか。

21 駐^レ蝶^ヲ牡丹^ノ院 蝶を駐む 牡丹院 外

22 翻^レ鷗^ヲ鴨^ノ緑^ノ濤 鷗を翻ふ 鴨緑の濤 竹

23 湘遊^レ遊^レ目^ヲ甫 湘遊 目を遊ばしむる甫 良

24 魏志^シ志^ス功^ヲ曹 魏志 功を志す曹 雲

25 花陣^ニ梅^ハ殊^ニ絶^ス 花陣 梅は殊に絶る 澗

26 蘆湾^ニ竿^ハ手^ヲ操^ル 蘆湾 竿は手づから操る 節

27 晒^レ簑^ヲ漁^ヲ逐^レ照^ヲ 簑を晒して漁は照を逐ふ 岳

28 彩^メ縞^ヲ鶴^ノ鳴^ク阜^ニ 縞を彩して鶴は阜に鳴く 宮

29 膾^ニ口^ニ林^ノ詩^ノ味^ヲ 口に膾す 林が詩味 御

30 図^レ形^ヲ蘇^ノ節^ノ旄 形を図す 蘇が節旄 渭

(10) 鴨の頭のような緑色の水。蘇軾「小舟浮鴨緑、大杓渴鷺黃」(乗舟過賈取水閣、収不在、見其子、三首、其二)。

(11) 『詩経』「鶴鳴于九皋、声聞于野」(子雅・鶴鳴)。

(12) 北宋詩人の林逋、鶴を飼い、梅妻鶴子と称される。詩句「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」(山園小梅)が絶唱とされる。

(13) 杖節の飾り物。蘇武が匈奴に捕らわれ、「杖漢節牧羊、臥起操持、節旄尽落」(漢書・蘇武伝)という。「図形」とは蘇武が麒麟閣に画かれたことを指す。

31 利^ニ奔^ニ登^ル断^ニ壟^ニ 利奔 断壟に登る 峰

32 厚^ニ載^ニ祭^ニ堅^ニ牢^ヲ 厚載 堅牢を祭る 外

33 民^ノ戸^ノ餉^ヲ苗^ヲ閤^ニ 民戸 苗に餉して閤し 雲

34 女^ノ糸^ヲ帯^ヲ暖^ヲ繰^ル 女糸 暖を帯びて繰る 御

35 霧^ノ間^ニ容^レ髪^ヲ柳 霧間に髪を容るるは柳 竹

36 雲^ノ外^ニ湿^ス髭^ヲ葡 雲外 髭を湿すは葡 岳

37 葉^ハ長^{ナガシ}、無^ム方^{カタ}、葉^ハ 葉長は無方の葉

節

42 鞋^ハ、朝^{アサ}苦^ク暮^{ユフ}、勞^{ラウ} 鞋は朝苦 暮勞

鞋は朝苦 暮勞

節

38 刀^タ頭^{カブ}、三^ミ益^{セキ}、刀^タ頭^{カブ}は三益の力

澗

43 行^{ユク}、歌^カ樵^{セウ}覺^{カク}陸^{リク} 行くゆく歌ひて樵陸かと覺ふ

行くゆく歌ひて樵陸かと覺ふ

御

39 小^コ、哉^ヤ、鵬^{ホウ}背^セ、泰^{タイ} 小しきなる哉 鵬背の泰

御

44 巧^{タカシ}織^{オリ}、妾^{メケ}思^シ、淫^{イン} 巧みに織りて妾淫を思ふ

巧みに織りて妾淫を思ふ

雲

40 瞳^メ若^カ、鰭^{ササ}睛^メ漕^ウ、瞳^メ若^カたり 鰭睛の漕

良

45 艷^{イロハシ}、簡^{カン}老^{ラウ}、羞^{ハズカシ}看^ミ、艷^{イロハシ}簡^{カン} 老いて看ることを羞づ

艷簡 老いて看ることを羞づ

外

(14) 切り立つ崖のこと。『孟子・公孫丑下』「有賤丈夫焉、必求壘断而登之、以左右望、而罔市利」。黄庭堅「人登断壘求、我目帰鴻送」(題王仲弓兄弟巽亭)。

(15) 大地をいう。『易経・坤』「坤厚載物、徳合無疆」。

(16) 新たに開墾した田地。『三体詩』に所収される王維「積雨空林煙火遲、蒸藜炊黍餉東菑」(積雨輞川莊)を踏まえるか。

(17) 酒。『漢書・食貨志下』「酒、百葉之長、嘉會之好」。

(18) 刀頭は「還」の隠語。『漢書・李陵伝』「漢武帝時李陵敗降匈奴、昭帝即位、遣陵故人任立政等三人至匈奴招陵」。

(中略) 立政等見陵、未得私語、即目視陵、而数数自循其刀環、握其足、陰諭之、言可還漢也。三益は三人の旧友を指す。

(19) 『莊子』「及奔逸絶塵、而回瞳若乎後者、夫子不言而信」(外篇・田子方)。「鰭睛」に関して典故は不明、後考を待つ。

41 鏡^{カミ}、昨^ノ非^ハ今^ノ是^シ 鏡は昨非 今是

渭

51 孤^コ衾^{キン}知^ル、是^レ鉄^{テツ} 孤衾 是鉄なることを知る

孤衾 是鉄なることを知る

良

節

御

雲

外

節

岳

竹

重

御

節

満口

満口

良

52 文^イ字^{ツレ} 孰^レ于^レ糟^ニ | 文字 糟に孰れ 雲

得窺^ル (九日)。

53 学^{ガク} | 海^{カイ} 測^{スル} 無^ク 底^コ | 学海 測るに底無し 宮

61 蓮^{ハス} 有^ニ 喝^ツ 人^ノ 愛^ス | 蓮に喝人の愛有り 外

54 機^{ウツ} | 関^ケ 透^ス 也^ト | 褒^ム | 機関 透りてまた褒む 外

62 杏^{コウ} | 銘^ス 浪^{ナミ} 士^ノ 警^ス | 杏は浪士の警に銘ず 澗

55 济^{セイ} | 心^{シン} 虚^{コト} 作^ル 賊^ト | 济は心虚はりて賊と作る 竹

63 智^チ | 灯^{トウ} 挑^ツ 不^レ 尽^ス | 智灯 挑げ尽くさず 岳

56 兎^ウ | 德^{トク} ノ 輪^{リン} 如^シ | 毛^{モウ} | 兎は徳の輪きこと毛の如し 重

64 壮^{ソウ} | 筆^{ヒツ} 痒^{カサ} 能^ク 搔^ク | 壮筆 痒がり能く搔く 御

57 賢^{ケン} | 路^ロ 失^ス | 唐^{テイ} | 步^ブ | 賢路 唐歩を失す 御

65 吟^{イン} | 履^{リン} 免^ル 顛^{テン} | 蹶^{ケツ} | 吟履 顛蹶を免る 峰

58 俗^{ソク} | 風^{フウ} 嫌^キ | 越^ツ | 臊^{ソウ} | 俗風 越臊を嫌ふ 良

66 畢^{ヒツ} | 琵琶^{ヒツ} 雜^{サツ} | 切^キ | 嘈^{ソウ} | 畢琵琶 切嘈を雑ゆ 雲

59 種^{シュ} | 魚^{イサ} 家^カ 計^{ケイ} | 范^{ハン} | 魚を種ふ 家計の范 雲

67 相^{サウ} | 攸^キ 兜^{トウ} 率^{ソツ} | 伝^{デン} | 攸を相る 兜率の伝 良

60 施^セ | 馬^バ 閣^{カク} | 郎^{ロウ} | 綯^{オウ} | 馬を施す 閣郎の綯 峰

68 問^{モン} | 道^{ドウ} 菓^カ | 山^{サン} | 鞞^{クワ} | 道を問ふ 菓山の鞞 竹

(22) 『碧巖録・第三十九』「也褒也貶、両采一賽。将錯就錯、是什麼心行」。

(23) 『景德伝灯録・臨济禅師』「臨济大似白拈賊」。

(24) 『詩経』「人亦有言、徳輪如毛、民鮮克举之」(大雅・烝民)。張華「仁道不遐、徳輪如羽」(文選・勵志詩)。

(25) 蘇軾「何日五湖從范蠡、種魚万尾橘千頭」(次韻送張山人帰彭城)。范蠡が貨殖に長じた。

(26) 唐宰相の令狐綯。李商隱「郎君官貴施行馬、東閣無因再

70 茶^{チャ} | 漚^{ソウ} 聞^ク | 瀑^{ハク} | 熬^{オウ} | 茶漚 瀑の熬るを聞く 切

(27) 熱中症の人。「武王蔭喝人于楹下、左擁而右扇之、而天下懷其徳」(淮南子・人間訓)。蓮を愛したのはその姿がすがすがしいからか。

(28) 杏は酒の意。社日の酒は鬻を治すという。宋・方岳「邂

近治豊酒、春風免破除」(社日次韻) 他。

(29) 躓き倒れる。「顛蹶之請、望拝之謁、雖得則薄矣」(戦国策・斉策三)。ここは詩人の足取りをいう。

(30) 白居易「大弦嘈嘈如九前、小弦切々如私語」(琵琶行)。

(31) 好い土地など場所を見定める。蘇軾「余齡会有適、独往豈相攸」(正輔既見和復次前韻)。「兜率」は兜率天、「伝」との組合せは不明。

(32) 唐代禪師の葉山惟儼。学者の李翱が道を問うたという。釈紹曇「天本蔵雲、瓶元貯水。不会看経、那堪指示。寄語唐朝李相公、只須著眼聽松風」(李翱見葉山図贊)。

71 万³杉³ 廬³勝³ 幾³ 万杉 廬勝幾ばくぞ 雲

72 斗¹米¹ 雪¹頭¹ 洵¹ 斗米 雪頭洵る 澗

73 漏¹杓¹ 昏¹知¹ 識¹ 漏杓 知識を昏む 外

74 挽¹詞¹ 賦¹反¹ 騷¹ 挽詞 反騷を賦す 岳

75 宦¹情¹ 蠅¹鑽¹ 紙¹ 宦情 蠅紙を鑽る 渭

76 宴¹飲¹ 蟻¹浮¹ 醪¹ 宴飲 蟻醪に浮かぶ 宮

77 中¹矩¹ 旋¹陳¹ 跡¹ 矩に中りて陳跡を旋る 峰

78 運¹籌¹ 備¹武¹ 韜¹ 籌を運らして武韜を備ふ 竹

79 顔¹ 函¹与¹ 矢¹ 跖¹ 顔 函と矢と 重

80 賈¹ 忻¹ 酬¹ 袍¹ 賈 忻袍を酬ふ 澗

(33) 廬山にある万杉院、万杉禪寺。王十朋「廬山三百六十所、長有神光照万杉」。

(34) 雪頭は不明。雪は禪師雪峰義存か。『碧巖録・雪峰尽大地』「一日洞山問雪峰、作什麼。峰云、淘米。山云、淘沙去米、淘米去沙。峰云、沙米一齊去」。

(35) 「反離騷」、楊雄の賦の篇名、「離騷」を著した屈原を弔う。

(36) まず「蠅」が連想されたのは、前句の賦のつながりで、欧陽脩に「憎蒼蠅賦」がある。また「鑽紙」は古書のみで没頭することをいう。宋王洋「当年困流俗、鑽紙如痴蠅」(次韻政老夜坐有懷)。

(37) 『韓詩外伝』に「行步中規、折旋中矩」と見え、折旋という古代の礼儀の作法が基準に合うことか。

(38) 「六韜」という兵法の一つ、呂望撰とされ、太公兵法とも。張良が若い時この太公兵法を授けられ学び、後に「運籌策帷帳中」(史記・留侯世家)という。

(39) 戦国時代の范雎と須賈。范雎は曾て須賈に仕えていたが、須賈に讒言されて処罰を受けさせられ死ぬところだった。かろうじて魏の国を逃げだし、姓名を変え秦に仕えた。後に魏の使者として秦に來た須賈に、范雎はわざとみすばらしい服装を来て会いに行くと、故人だと気づかなかつた須賈はその寒さを憐れみ、袍を贈ったという。

綈袍恋恋。

81 巒^ヤ豈^ニ汗^レ秦^ノ垢^ニ

御

逐電何雄哉」（城東醉帰深夜復呼酒作此詩。「北嘶」も馬の動作。杜甫「我馬向北嘶、山猿飲相喚」（白沙渡）。

82 齡^ハ其^ニ希^フ閨^ノ尻^ニ

澗

(42) 圍圍洋洋。蘇軾「濺濺發發須臾間、圍圍洋洋尋丈外」（西湖秋涸、東池魚窘甚、因会客、呼網師遷之西池、為一笑之樂。夜帰、被酒不能寐、戲作放魚一首）。

83 怕^ル寒^ヲ南^ニ翥^ル鷗

外

91 駕^レ言^ハ頻^ニ喚^レ饋^ヲ

84 追^フ電^ヲ北^ニ嘶^ツ驚

節

92 奇^ト怪^ト肆^ニ連^テ鼈

85 侵^ス座^ヲ四^ノ圍^ノ草

岳

93 洲^ハ十^ノ具^ノ瞻^ル地

86 靠^{カク}床^ニ七^ノ尺^ノ蒿

澗

94 夕^ハ多^ク空^ト燈^ノ時

87 禪^ト禪^ト難^ク易^ク蜀^ノ

雲

95 輦^ト蹤^ト苔^ト半^ト碾^ル

88 漾^ト漾^ト圍^ノ洋^ノ漾^ト

節

96 金^ト相^ト蔗^ト何^ト撓^ル

89 流^テ涸^レ琴^亡矣

良

97 善^ト葉^ト分^ト身^ノ鹿

90 村^テ昏^テ笛^患切^リ

竹

98 野^ト生^ト伝^レ実^ヲ獐

(40) 罔^レ聞^カ。『史記・孔子世家』「木石之怪夔、罔^レ聞^ク水之怪龍」。また崑崙山の閩風嶺か。「閩尻」の用例は未見、後考を待つ。

(41) 逐^テ電^ヲ、馬^ノの俊^ク足^ヲを譬^スえる。陸游「冬夜走馬城東回、追^テ電^ヲ」

100 本^ト直^ト每^ニ忘^ル鑿^ヲ

(43) 『詩経・邶風』「駕^レ言^ハ出^テ遊^ブ、以^テ写^シ我^ノ憂^ヲ」（泉水）。

(44) 『列子・湯問』「有大人、举足不盈数千而暨五山之所、一釣而連六鼈」。李白「釣水路非遠、連鼈意何深」(贈臨祇
県令皓弟)。

(45) 『詩経・小雅・節南山』「節彼南山、維石岩岩。赫赫師尹、民具爾瞻」。衆望に望まれること。また宰相をいう。黄庭堅「傷心具瞻地、無復袞衣來」(王文恭公挽詞二首、其二)。

(46) 貪欲な人、また食を嗜む人。『韓非子・亡微』「饜貪而無厭、近利而好得者、可亡也」。ここは剛直さを守り、貪欲さを排除する意か。

歌第五 慶長十八年十月二十七日

1 梅^ハ、依^レ誇^ル御^ニ愛^ニ 梅は御愛に誇るに依りて

2 非^ス小^ニ帯^フ春^一和^一 小に非ず 春和を帯ぶ 圭

3 林^ハ、未^レ散^ラ清^シ影^ヲ 林は未だ清影を散ぜず

4 介^ハ、間^ニ漏^ヌ月^一娥^ヲ 間に介まりて月娥を漏らす 潤

5 湖^ハ、湘^ハ詩^ハ態^一度^一 湖湘は詩の態度 御

6 支^ハ、日^ハ蔵^ス修^一多^一 支日 修多を蔵す 心

7 襯^レ雪^ヲ鶯^ハ衣^一凍^ル 雪を襯にして鶯衣凍る 節

8 駕^レ風^ニ蝶^ト輩^過 風に駕して蝶輩過ぐ 雲

9 名^ハ、芳^シ精^ニ亮^ニ 名は芳し 菊に精たる亮 竹

10 語^ハ、麗^シ花^ヲ坡^一 語は麗し 花を綺なす坡 良

(1) 菊花の種類。蘭坡「凄涼南閨無人至、籬落霜寒御愛黄」(楊妃菊)。

(2) 小春日和。范成大「菊催重九近、梅占小春先」(東宮寿詩)。同じく宋代の陳允平「寒輕菊未殘、春小梅初破」(滿路花)など。本作の時期は十月末なので「小春」とはやや言いがたいが、それでも春の陽気を帯び、梅が咲くという。

(3) 清朗な月光。杜甫「陰壑生虛籟、月林散清影」(遊龍門奉先寺)。ここは月の光が漏れ出る程度で、まだ林間にあまねく注いでいない情景をいう。

(4) すがた、趣き、勢い。韓愈「君詩多態度、藹藹春空雲」(醉贈張秘書)。

(5) 中国と日本。修多は仏典。

(6) 策彦周良「半恨東風半北風、叢叢襯雪牡丹紅」(雪内牡丹)など、雪を背景にする、雪を比較の対象とするの意。『雲其花錦襯(雲は其れ花錦の襯)』(天正十九年四月和漢千句第八百韻)など、和漢聯句に用例が多く見られる。

11 文^ハ、壁^ニ費^ス心^一匠^一 文壁 心匠を費やす 麿

12 官^ニ茶^ス降^ス睡^ル魔^ニ

官茶⁽⁸⁾ 睡魔を降す

洪

13 挑^テ灯^ヲ廬^ノ瀑^ノ漲^ル

灯を挑みて廬瀑漲る

緒

14 下^ア米^メ渭^ノ流^リ沱^リ

下米^{あめ} 渭流沱たり

圭

15 南^ノ嶽^ノ屠^ル牛^ヲ呂^ニ

南嶽 牛を屠る呂⁽⁹⁾

澗

16 西^ノ天^ノ化^ス鹿^ト迦^ト

西天 鹿と化する迦

御

17 幢^ヲ揺^テ知^ル法^ノ苑^ヲ

幢揺れて法苑を知る

雲

18 機^ノ弁^ヲ蔑^シ懸^ニ河^ヲ

機弁 懸河⁽¹⁰⁾を蔑ろにす

竹

19 雲^ハ困^リ繞^リ予^ガ室^ヲ

雲は予が室を圍繞す

良

20 涯^ハ棲^リ遲^ス故^ノ窠^ニ

涯は故窠に棲遲す

賡

(7) 荆文璧、和氏璧。廬謔「恨無随侯珠、以酬荆文璧」(文選・答魏子悌詩)。また心匠は意匠工夫。劉禹錫「丞相

新家伊水頭、智囊心匠日増修」(和思黯憶南莊見示)。

(8) 蘇軾「爭新買寵各出意、今年斗品充官茶」(荔枝嘆)。

(9) 呂尚太公望が周に仕える前に朝歌で牛を殺して生業とした。『韓詩外伝』「太公望少為人婿、老而見去、屠牛朝歌」。

(10) 弃舌を振るうさま。『世説新語・賞誉』「郭子玄語議如懸

河渴」。『臨濟録』「我亦不取爾辯似懸河。我亦不取爾聰明智慧。唯要爾真正見解」。

(11) 遊息すること。『詩経・国風』「衡門之下、可以棲遲」(衡門)。特に宋詩に用例が多い。黄庭堅「棲遲林丘下、欲濯無塵纒」(平陰張澄居士隱処三詩、其三亨泉)。

河渴」。『臨濟録』「我亦不取爾辯似懸河。我亦不取爾聰明智慧。唯要爾真正見解」。

(11) 遊息すること。『詩経・国風』「衡門之下、可以棲遲」(衡門)。特に宋詩に用例が多い。黄庭堅「棲遲林丘下、欲濯無塵纒」(平陰張澄居士隱処三詩、其三亨泉)。

21 隱^ニ淪^ル求^ム底^ヲ豫^ニ

隱淪 豫^{よろこ}びを底^{いた}すことを求む

洪

22 方^ニ相^ム進^ム驅^レ難^ヲ

方相⁽¹²⁾ 驅難を進む

澗

23 秋^ノ暑^ク虎^ノ残^レ患^ヲ

秋暑 虎は患を残す

圭

24 暖^ク檐^ノ禽^ノ発^ス歌^ヲ

暖檐 禽は歌を発す

御

25 緑^ク肥^ク山^ノ豈^ニ瘦^ク

緑肥えて 山は豈に瘦せんや

竹

26 蕉^ノ稚^ク雨^ニ從^テ他^ニ

蕉稚にして雨^{あめ}從^{まか}れ他^た

雲

27 妾^ハ溺^ル断^ル腸^ノ水^ニ

妾は断腸の水に溺る

賡

28 王^ハ傾^ク索^ル笑^ヲ渦^ニ

王は笑を索むる渦^{うず}に傾く

御

29 偽^ク烽^ノ蚩^ニ每^ニ挙^グ

偽烽 蚩は毎に挙ぐ

澗

30 垂^リ露^ク兔^ノ頻^ニ呵^ス

垂露 兔は頻に呵す

洪

(12) 喜びを得ること。「孟子・離婁上」「舜尽事親之道、而瞽瞍底豫。瞽瞍底豫而天下化。瞽瞍底豫而天下之為父子者定。此之謂大孝」。

(13) 疫病の悪鬼や山川の妖怪などを駆除する神霊。『後漢書・礼儀下』「先臘一日、大儺、謂之逐疫。(中略)方相氏黄金四目、蒙熊皮、玄衣朱裳、執戈揚盾」。

(14) 『呂氏春秋』「幽王擊鼓、諸侯之兵皆至、褒姒大説、喜之。幽王欲褒姒之笑也、因数擊鼓、諸侯之兵数至而無寇」。

31 蘭渚 相^レ攸^レ濟 蘭渚 攸を相る濟 雲

32 崧峰 面^レ辟^レ磨 崧峰 辟に面する磨 良

33 宴安 雖^レ中^レ毒 宴安 毒に中ると雖も 澗

34 廷試 已^レ登^レ科 廷試 已に科に登る 圭

35 槐北 夏^レ疎^レ扇 槐北 夏は扇を疎んず 廣

36 樹東 朝^レ晒^レ簑 樹東 朝に簑を晒す 御

37 春鋤 誰^レ付^レ鷺 春鋤 誰か鷺に付す 雲

38 脂粉 動^レ粧^レ蛾 脂粉 動すれば蛾を粧ふ 洪

39 燕趙 収^レ蔵^レ鏡 燕趙 収蔵の鏡 竹

40 魯^レ鄆 冤^レ対^レ龜 魯^レ鄆 冤対の龜 雲

(15) 安逸にして享乐的。『漢書・景十三王伝贊』「是故古人以宴安為鳩毒、亡徳而富貴、謂之不幸」。

(16) 槐の北、槐の元の意か。『周礼・秋官・朝士』「朝士、掌建邦外朝之法、左九棘、孤卿大夫位焉。群士在其後。右九棘、公、侯、伯、子、男位焉。群吏在其後。面三槐、三公位焉」。鄭玄注に「槐之言懷也、懷來人於此、欲与之謀」。前句の「登科」を受けて、重要な地位を占める臣下の意。

(17) 春と鋤、農具をいう。黄庭堅詩に「水遠山長双厲玉、身閑心苦一春鋤(池口風雨留三日)など数例ある。欧陽脩「況有西隣隱君子、輕簑短笠伴春鋤」(書懷)。

(18) 燕国と趙国。ここは美人の意。『文選・古詩十九首』「燕趙多佳人、美者顔如玉」(東城高且長)。

(19) 魯国と趙国の邯鄲。魯の酒は味が薄い。『莊子・胠篋』「唇竭則齒寒、魯酒薄而邯鄲困、聖人生而大盜起」。思わざる禍を蒙る譬え。黄庭堅「魯酒困邯鄲、老龜禍枯桑」(觀秘閣蘇子美題壁及中人張侯家墨跡十九紙率同舍錢才翁学士賦之)。

41 怒潮 船^レ後^レ至 怒潮 船は後れて至る 良

42 飛電 玉^レ前^レ羅 飛電 玉は前に羅なる 竹

43 風翥 紅^レ繚^レ乱 風翥 紅繚乱 御

44 鷗¹翔^ア白¹曼¹陀

淵

52 靈¹椿¹等¹刹¹那¹

靈椿 刹那に等し

竹

45 微¹嵐¹鐘¹讓¹レ^ル歩¹

微嵐 鐘は歩を讓る

洪

53 非¹レ^ト非¹レ^ト莊¹注¹レ^ス郭¹

非を非として莊は郭を注す

淵

46 治¹世¹柄¹除¹レ^ク苛¹

治世 柄は苛を除く

圭

54 幼¹レ^ト幼¹レ^ト孔¹伝¹レ^ク軻¹

幼を幼として孔は軻に伝ふ

洪

47 洪¹彼¹垂¹鬚¹一¹仏

洪は彼の垂鬚仏

御

55 雁¹陣¹學¹軍¹旅¹

雁陣 軍旅を學ぶ

御

48 邢¹其¹饒¹舌¹婆

邢は其の饒舌の婆

澗

56 鴻¹門¹舞¹太¹阿¹

鴻門 太阿を舞す

雲

49 有¹時¹雷¹一¹喝

有る時は雷も一喝

竹

57 增¹自¹然¹弥¹勒

増は自然の弥勒

淵

50 補¹且¹地¹三¹摩

補ひて且た 地三摩

麿

58 聃¹虚¹無¹撰¹波

聃は虚無の撰波

良

(20) 柄は国柄、権力。『漢書・劉向伝』「夫大臣操権柄、持国政、未有不為害者也」。

(21) 惠洪禪師。『石門文字禪』「海上垂鬚佛、軍中有髮僧」(初渡海自号甘露滅)。

(22) 義玄禪師。『石門文字禪』「何用老婆更饒舌、暗中五色自成文」(送太淳長老住明教)。

(23) 三摩地、三昧。『石門文字禪』「一念断攀縁、即入三摩地」(次韻吳興宗送從滄山空印出家)。「補且」は「且補」

の調整か、不明。ひとまず「補ひて且つ」と訓読する。

51 弱¹柳¹苦¹牆¹短¹ 弱柳 牆の短きに苦しむ 雲

61 窺¹便¹民¹家¹燕 便を窺ふ 民家の燕 麿

(26) 迦撰波仏のことか。聃は老子、李耳。

(25) 古代の名劍。『史記・蘇秦列伝』「韓卒之劍戟皆出於冥山(中略)龍淵、太阿、皆陸断牛馬、水截鵠雁」。

62 添^レ憂^テ胸界^ノ蜩 憂を添ふ 胸界の蜩

洪

71 墮^レ痴^ニ唯我耳^ノ 痴に墮すれば唯だ我耳

竹

63 半^ノ論童効^レ替 半論 童は替に効ふ

雲

72 成^レ律^ヲ是^レ僧伽 律を成すは是れ僧伽

御

64 尤^ノ氏孰^カ如^シ何^カ 尤氏 孰れか何か如かん

良

73 六^ノ吉過^レ休難^シ 六吉 過ぎれば休する難

良

65 高^ノ義秦^ノ輪漢^ニ 高義 秦は漢に輪く

御

74 長^ノ安時^ニ習^フ柯^ノ 長安 時に習ふ柯

御

66 独^ノ醒楚^ノ弔^ス抽^ヲ 独醒 楚は抽を弔す

廣

75 鳧^ノ浮^テ欺^ク渡^リ子^ヲ 鳧浮きて渡子を欺く

澗

67 色^ノ華^ノ蘭^ノ絳^ノ雉^ノ 色華し 蘭の如き絳る雉

御

76 毳^ノ集^テ省^ク警^シ訛^ヲ 毳集りて警訛を省く

竹

68 手^ノ種^ノ茂^ノ蕃^ノ駝^ノ 手から種ふ 茂して蕃き駝

雲

77 声^ノ杖^ノ妨^グ禪^ヲ寂^ヲ 声杖 禪寂を妨ぐ

雲

69 養^ハ性^ヲ儒^ノ玄^ノ要^ヲ 性を養へば儒の玄要

洪

78 騷^ノ筵^ト事^ト醉^ヲ哦^ヲ 騷筵 醉哦を事とす

廣

70 結^テ交^ヲ士^ノ切^テ磋^ヲ 交を結びて士は切磋

圭

79 曉^ノ楓^ハ真^ノ赤^ノ褪^ニ 曉楓は真の赤褪

洪

(27) 後漢の名將敵尤。『漢書・匈奴伝』「臣聞匈奴為害、所從來久矣、未聞上世有必征之者也。後世三家周、秦、漢征之、然皆未有得上策者也。周得中策、漢得下策、秦無策焉」。

80 沈^ハ綏^ハ彼^ノ薰^ノ荷^ノ 沈綏は彼の薰荷

良

(28) 郭橐駝。柳宗元「郭橐駝、不知始何名、病僂隆然伏行、有類橐駝者、故鄉人号之駝。(中略)駝業種樹、凡長安豪富人為觀遊及売果者、皆爭迎取養。視駝所種樹、或移徒、無不活、且碩茂、早實以蕃」。

(29) 僧侶。前句の「墮痴」を受けて、ここは『冷齋夜話』に基づく。「僧伽龍朔中遊江淮間、其跡甚異。(中略)此正所謂对痴人说夢耳」(痴人说夢中說夢)。

(30) 占星術の用語か、不明。

(31) 唐の段成式、字柯古、『酉陽雜俎』を著す。

(32) 淆訛とも、混淆。間違い。『碧巖録・十五』「只争一字、

為什麼却有千差万別。且道、警訛在什麼處。「鼃」は僧服の一種、ここは僧侶の意か。

(33) 沈香の煙。黃庭堅「百鍊香螺沈水、宝薰近出江南。一椀黃雲繞几、深禪想对同參」(有惠江南帳中香者戲答六言二首、其一)。

81 滴^{ルハ}夜^ニ夜^ニ泉^ヲ滴^ラす 夜夜の泉を滴るは涙

82 涵^{ムハ}村^ノ村^ノ社^ニ配^セり 村村の社に涵めば配せり

83 吠^ヲ堯^ヲ哇^ム実^ヲ犬^ヲ 堯を吠ゆる 実を哇む犬

84 類^{ダク}藜^{ヒス}運^ス謀^ヲ驚^ヲ 藜に類ひす 謀を運す驚

85 淵^ニ黙^シ舩^ヲ枚^ヲ否^ヤ 淵黙 枚を舩むや否や

86 郷^ノ情^ヲ旋^ニ錦^ヲ俄^カ 郷情 錦を旋すこと俄かなり

87 入^レ焦^ニ忘^ス策^ヲ蹇^ヲ 焦りに入りて蹇に策つことを忘れず

88 夢^ミ文^ヲ厭^ム樞^ヲ鼃^ヲ 文を夢みて鼃を樞つを厭ふ

89 好^ク会^フ惜^ム楼^ヲ暮^ル 好会 楼の暮るるを惜しむ

90 至^ニ尊^ニ仰^グ嶺^ヲ峩^ル 至尊 嶺の仰峩たるを仰ぐ

(34) 『漢書・鄒陽伝』「今人主誠能去驕傲之心、懷可報之意、

(中略) 則桀之犬可使吠堯、蹠之客可使刺由」。

(35) 唐代の名將李愬が雪夜に蔡州を奇襲した際、「近城有鷺鴨池、愬令驚擊之、以雜其声」(旧唐書・李晟列伝)といふ。「運謀」は策略を巡らすこと。

(36) 行軍する際に枚を口に含み、声を出さないようにする。籀綱「水城朝浴鉄、地道夜衝枚」(従軍行)。蘇軾「那堪李常侍、入蔡夜衝枚」(和劉景文雪)。「淵黙」は沈黙。

(37) 「旋」は「周旋旗旗之指麾也」(説文)、則ち旗竿を回すこと。進軍を指揮することを受けるか。同時に「錦旋」は故郷に錦を飾ること。

(38) 鼃鼓。「厭樞鼃」は鼃鼓を叩くのを厭うこと。南江「蜃氣昼沈津霧落、鼃声夜落晚潮収」(送季莫上人赴土州吸江菴)。

91 指^シ陽^ヲ愁^フ之^ヲ劍^ニ 陽を指して劍に乏しきを愁ふ

92 離^ニ袖^ヲ欲^ス強^ク拖^ク 離袖 強ひて拖かんと欲す

93 温^メ故^ヲ宜^ク探^ル緒^ヲ 故を温めて宜しく緒を探るべし

94 講^シ帷^ヲ聽^ク説^ヲ脞^ヲ 講帷 脞を説くを聴く

95 恩^ヲ波^ヲ堪^ル激^ス懦^ヲ 恩波 懦を激するに堪えたり

96 矮^ニ屋^ヲ善^ク容^ル矮^ヲ 矮屋 善く矮さを容る

97 蒲伏 媿コウムミチ 篋カク 兔ウ 蒲伏 篋(42) 媿コウ む 兔ウ 良

(41) 身長の低い人。陸龜蒙他「悖傷松形矮 般跚檜樾炷」(報恩寺南池聯句)。

98 檣コウ 才 測ソク 海カイ 螺ラ 檣(43) 才 海を測る螺 賡

(42) 「篋」は「遠」の異体字で「みち」と訓むのは根拠が不明。兔に関する典拠も不明。後考を待つ。

99 瑤コウ 台 談 落屑ラクセツ 瑤台 談は屑(44)を落とす 圭

(43) 木材として用いられない檣。『莊子・逍遙遊』「我有大樹、人謂之檣、其大本擁腫而中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩、立之塗、匠者不顧」。「測海」は自らの力量を知らず、浅はかで無知の様子。宋彭汝礪「傾螺思測海、擿埴強求塗」(上劉推官一首)。

100 繡コウ 閨 共キョウ 留リウ 鞵コウ 繡閨 共に鞵を留む 竹

(44) 蘇軾「君談似落屑、我飲如弈棋」(次韻錢穆父會飲)。蘇轍「清談如鋸木、落屑紛相委」(送王廷老朝散知虢州)。

(39) 魯陽が沈む夕日を戻した故事か。『淮南子・覽冥訓』「魯陽公与韓搆難、戰酣日暮、援戈而撝之、日為之反三舍」。

(40) 叢脞か。「細碎無大略」(玉篇)、松形また字間が深いともいう。

(よう) こんぼう・武蔵野大学准教授

(40) 叢脞か。「細碎無大略」(玉篇)、松形また字間が深いともいう。

(よう) こんぼう・武蔵野大学准教授